



舛方周一郎 著  
『つながりと選択の環境政治学  
—「グローバル・ガバナンス」の時代における  
ブラジル気候変動政策』

晃洋書房 2022年 xiii + 255 ページ

ISBN 978-4771035492

本書では、「環境保護と経済開発の間で政策選択を迫られる新興国のなかで、ブラジルはどのような条件のもとで気候変動政策をめぐる制度改革を実施してきたのか」という問いを、「環境政治学に基づく分析から説明すること」を目的としている。特定の政策がどのように形成されたのか、その過程を政治学的視点から分析するアプローチには、利益政治、国際的伝播、アイデアや言説などがあるが、気候変動という一国内に限られないグローバルな課題にかかわる政策を対象とする本書は、多層ガバナンスという概念に注目する。

世界では冷戦が終結し新しい国際秩序が模索されるなか、環境など新たに注目されるようになったグローバルな課題をめぐる複数の国際的なレジームが形成され、課題の当該国家や国際レジーム間でガバナンスの主導権争いが展開されるようになった。一方、ブラジルは1985年に軍政から民政へ移管し民主主義が定着するなか、地球の気候変動に多大な影響を与えるアマゾン地域を有するため、環境問題に関する国際レジームとの関係を考慮しながら気候変動政策を民主的に策定する必要に迫られた。本書は、「ブラジルの気候変動政策は政策ネットワークの制度化が進むことで採択された」という仮説のもと、分析や論理が進められていくと紹介者は理解する。

本書は、著者が2018年に取得した博士号の論文「ブラジル気候変動政策の形成における政策ネットワークの役割」をもとに、タイトルを「つながりと選択の環境政治学」に変更し加筆修正したものである。通常、書籍のタイトルは書の内容を言い表すが、本書では「つながり」や「選択」といったワードよりも、博士論文タイトルにある「政策ネットワーク」を中心に論が展開されているように思われる。また、論理や表現が分かりにくい点などが散見され、本書の理解を困難にしているように感じられた。

近年、注目されている国連のSDGs（持続可能な開発目標）は、気候変動を具体的な目標のひとつに掲げるとともに、広範な環境問題を包摂するものである。これら世界的に関心の高まってきたグローバルな課題に対して、民主化後に国家の再建を試みていたブラジルがどのように対処したのか。その国内外のダイナミズムを知るうえで、本書は示唆に富んでいるといえよう。

近田亮平（こんた・りょうへい／アジア経済研究所）